
魔法騎士と精霊魔法師

銀の幻想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法騎士と精霊魔法師

【Nコード】

N6914W

【作者名】

銀の幻想

【あらすじ】

世界の全てを破壊しつくしていた彼は狂っていた。過去に無理矢理行われた人体実験により、最強の体と魔法力を手に入れさせられたがその代償は精神異常という最悪の結末により世界は滅びかけていた。しかし最後の最後に精霊魔法使いと名乗る女が彼を止めて……。剣と魔法の異世界ファンタジーです。

この小説の更新スピードは結構遅めです。

彼戻ル（前書き）

はじめましての方は初めまして。久しぶりの方はお久しぶりです。
今回はオリジナル小説です。

作者は文章書くのが下手だと思うので、アドバイスなどあったらお願いします。

彼戻ル

ある広い部屋で男と女が戦っていた。

しかし、それは戦いと言つてよいものではなかった。

男は狂った様に戦っているが、女は余裕の表情で椅子に座ったまま男がやることを眺めている。

男の容姿は背中に羽が生えていて、体中汚いものがついていて、逆に女は清楚な身なりをしており、他の人たちから見たら美人と言われそうな身なりだった。

女の前には見えない障壁のようなものがあつて、男の攻撃は全て防がれる。攻撃を放つても女の前の空間をゆがませるだけである。だが女が攻撃した場合は違った。

女が手に持つ扇子をふわりと、軽く煽いただけで男の身体は四方に飛び散る。

でも男は死なない。破損した身体が元の場所に戻り再生するのだ。再生したあと、再び男が攻撃を仕掛け始める。さつきからこれの繰り返しであった。

「あはははは！！ エクストラ 最上級魔法術 ストレート 直線魔法 キサグラム 『六芒星』！」

男は狂ったように笑いながら何かの呪文を唱えた。

男が手を女の方に向けて、自身が持つ最強の1つの魔法を放つ。男の手の前に魔法陣が現れ、さらにそれを囲むように6つの魔法陣が現れる。そしてその魔法陣を結び、星型の紋章が浮き上がる。そこから白い巨大な閃光が女に向かって放たれる。その威力は町を1つ軽く破壊するほどの威力を持つのだが、今回もただ女の目の前にある見えない障壁をゆがめただけであつた。

「ふふ。何度やっても無駄じゃと、さつきから言っておるのじゃが？」

「知らねえな!!」

女が余裕の表情を保ったまま男に話かけるので、男はイラッとしたように乱暴に言葉を返す。

「そんなに慌てなくても、時間はたくさんある。ゆっくりしていけ」
「……ちゃんと殺してやるから安心しろ！」

男が自身の横に提げている剣を抜き女に斬りかかろうとする。女はただその様子を見つめているだけだ。

パン！ というかなりでかい音が部屋に響きわたる。男の剣が女の障壁に弾かれた音だ。

「クソツタレが!!」

「言葉使いが悪いぞ、小僧」

そう言つて女が扇子をまた煽ぐと男はまた粉々になって碎け散つた。勿論剣など見る形もない。
が、やはり再生する。

「……ん？」

今度男が再生した形はさっきまでとは違う形になっていた。右腕がまるで鋭い槍のような形になっていた……。

「あああああああー！」

それを女の障壁に向けてぶつける。ちなみに移動スピードは常人の目では捉えられないような速さだが、女にははつきりと姿が見えていた。

キューン！ という音が部屋中に響く。

今度もまた攻撃が障壁に阻まれて、男の右腕が吹き飛ばされた。が、吹き飛ばされた腕の中からさらに腕があり、もう1度障壁に攻撃を加えると障壁が砕け散った。

「！？」

「終わりだあー！！」

そして男が女に向かって殴りかかろうとして………人差し指1本で腕を受け止められていた。

「！？」

今度は男が驚いた。

障壁をぶち破った瞬間にすぐさま対応されるとは思ってもしなかったし、それに自身の攻撃が指先1つで防がれるなんてことは夢にも思っただからである。

「凄いの。私の障壁が破られたのは初めてじゃ」

そう言っ て女は今度は扇子ではなく、自分の手を扇子のようにして煽いだ。

ふわーと風が男の方に少しだけ行ったかと思うと、その瞬間に男は首1つになっ て体は吹き飛んでいた。今度は体は再生しない。

「あれ……？ 身体が……ない？」

「……そんな姿になっ てもまだ生きているのか」

女は呆れたように男に向かって言っ た。

「悪いが精霊魔法を使わさせてもらっ た。お前の身体はもう再生することはない」

「精霊魔法……？」

「知らないのか？ 私は最上位精霊魔法使いじゃ。私の障壁が破られたのは初めてじゃ、誇りに思っ てよいぞ」

「……悪い、狂っ てた時の記憶が曖昧なんだ。お前の言っ てることもあんまり理解できない」

「なんと、それはそれは！」

女はなぜか愉快そうだった。

男は首だけで何も出来ないの で、ただ女の様子を見ていた。

「ふむ。お前がどうしてそうなっ たか、少し気になるのだが見せれもらっ ても構わないか？」

「……好きにすればいい」

「では、失礼する」

そう言っ て女は立ち上がった男の首を持ち上げてから、また元の場所に戻り、自らの頭と男の頭をこつんとぶっ つけた。

「ふむふむ。大体わかってきたぞ」

そう言いながら女は男の首を自分の太ももの上に乗せて言った。

「すげえ居心地悪いんですけど」

「なるほどなるほど。16歳の時にあの奴隷大国に奴隷として連れて行かれ、そこで人体実験を76回されてその身体になったのか。ふむ、お前の身体にも精霊魔法がかかっていたようじゃな」

「そういえば……そんなこともあったけ……？」

「んん？ そういえばお前は狂っていた時の記憶はないんじゃないかな？」

「……少しは、記憶にある」

「そうか、では続きを読み取らせてもらうが、よいな？」

「良いつて言ってるだろ」

「そうじゃったな！」

女は笑いながらまた男の頭を自身の頭にぶつける。

「そこから改造された身体で奴隷大国を潰し、他の国も全て破壊してきたのか……なんと、私が少し目を離しているうちに人間はお前が全員殺してしまったか！ それに、魔物の森もほとんど焼き尽くすとは……なんと面白い！」

「面白い？ どこが面白いってんだ！？ こんな体にされてからどれだけ酷い目に遭ったと思ってんだ！！」

「まあまあ。落ち着くのじゃ。今読み取って差し上げる」

「……ちっ」

しばらく女は目を瞑って何かを思考しているように見えるが、どうやらまた男の過去をよ読み取っているらしい。

「その実験で約5年間使い、そこから魔法の訓練をさせられ、さらに10年。それだけの時間でよくここまでやれるような力が付いたな、まあ最強には程遠いが」

「あの俺の力が最強じゃないと？」

「うむ。力を得ることなら誰にだって出来る。本当に強い者というのは、力ばかりには捕らわれてはいない者のことじゃ。」

「まあどうでもいいことだな。その力で俺をこういう目に合わせた奴らに復讐出来たんだからな」

「なるほどな。それから再生能力と自身の強力な魔法の力で本国を潰し、周りの国を潰して行ったんだな？ そんなこととして悔んだりしておらぬのか？」

「……ああ。俺を売った親も殺してやったよ。親を殺したって、何の後悔もないさ……」

男は諦めたように言った。

「そんな声で言われても後悔があるようにしか見えんのだが……」

女は困ったように言った。

「ただ……」

「ん？」

「1つだけ、あるんだ」

「ほう」

女は黙って男の話を聞く。

「自分の国を潰すときだって、俺はやりたくてやったわけじゃないんだ。体が勝手に動いてくし、口は言いたくもないことばかりしゃべりやがるし……ってもこの状況じゃあ、俺はただの大量殺人者だ」

「それはそうじゃな」

「でも、俺は殺されるたびに言葉だけは少しの間普通に話せるようになったんだ。なぜだかわからないけれど」

「それはお前に掛かっている精霊魔法が身体を再生させるのに必要になったから、ということだろう」

「それで俺は自国を潰した後、次の国に行った時、俺は周りの奴らに取り押さえてもらうことが出来てたんだ」

「ふむふむ、続きを」

「そこで俺は地下牢だったか、どこかは忘れていたけれど、閉じ込められていた。そのまま永遠に縛られていたかった。多分そこにも精霊魔法とかがつてのが掛かってたから俺が力で破ることも出来なかった」

「なぜ脱出できたのじゃ？」

「そこによ……馬鹿な奴が来てさ、そいつの姿はぼんやりとしか覚えてないけれど女性だった。で、今でもはつきりと覚えてることがあるんだけどよ、俺の縄を解いちまったんだ……そいつは、俺に向かってこう言いながら。『貴方の目は狂ってなんかいない。きつと何かの間違いで捕まったんだろうから、逃がしてあげるね。』ってな。俺は初めてそいつを殺したくないって思った。でも俺の身体は言うことを聞かなかった。殺してしまったんだよ！縄を解いてもらった瞬間に！」

「……」

「そこから、俺の記憶は完全にないんだ……気付いたらあんたの前で首1個になってた。他の奴らを殺したことは後悔してるって言うたらしてるかもしれないけど、あんまりしてないんだ」

「なぜじゃ？」

「そいつらは俺のことを最後まで化け物としか呼ばなかった、軽蔑した目でしか見ていなかった。でも、あいつだけは違った。少なくとも俺を軽蔑した目でなんて見ていなかった……あいつを殺してしまったこの身体が1番憎い。っても俺の身体は今のはあんたに吹き飛

ばされてないけどな」

女は黙っていた。男もただ目を瞑っていた。

「なあ、あんたの力で俺を殺すことって出来るよな？」

「……勿論出来る」

「なら、止め刺してくれないかな？　俺はもう生きたくもないんだ。人を殺してばかりの人生だったしよ……このまま永遠に死ぬことすら出来ないなんて嫌だからさ、どうせこのまま元の身体に戻ったら狂っちまうし」

「……そうじゃな」

「悪いな、あんた1人にさせて、他の奴らは全員俺が殺してしまっただろ？」

「大丈夫じゃ、私は人間ではない」

「なんだよそれ？　おかしな冗談か？」

「ふふ。まあ死に逝くお前には関係ないじゃろ？」

「それもそうだな」

女は男の頭を地面において、手に光を集めていき……そして、光が手から消えた。

「おいおい、失敗か？」

「……お前、過去に戻ってみないか？」

「はあ？」

男は女が言っていることの意味が理解出来なかった。

女は男を無視して男の頭を再び自分の方へ持っていく。

「つまり、お前の身体が改造される前に戻ってみないかと、聞いておるのじゃ」

「戻れるのか……？」

「戻れなかったら最初からこんな提案はせんわ」

「戻ったら、あいつは生きてるのか？」

「勿論じゃとも。誰かに殺されたりしていなかったらな」

「なんでそんな可能性があるんだ？ 過去に戻るってことは今と変わらないんじゃないのか？」

「馬鹿者。お前が今の記憶と力を持ったまま、過去に戻って何も変わらないとも思っとるのか？ 断言しよう。私がお前を過去に戻したら何か絶対歴史が変わる」

「そりゃ……俺が殺した奴らはみんな生きてるだろうけど……」

「まあ何があってもおかしくない世界だと思ってくれていい。自分の記憶はあてにならんぞ？」

「元々俺の記憶なんてほとんど無いんだから役に立たねーよ」

「そうじゃな！」

「だろ？」

「それで、どうする？」

「……」

男は考えた。

過去に戻ったとしてどうする？ この世界で自分が殺したのは変わりないし、戻ったからと言って、何か必ず出来るというわけではない。

このまま死んだとしたら、絶対何も出来ない……。

「戻してくれるか？」

「む、そうするか？」

「ああ、このまま死んだとしても、俺は何も出来ない。もし過去に行った世界で俺が何か出来るものがある可能性があるなら、俺はそっちに行く」

「安心しろ、確実にその世界にはお前にしかできないことがある。」

それに、その世界はこの世界とは確実に何かが違っている。用心するとい

「なんで言い切れるんだよ」

「それは私が　だからさ」

「は？　ちゃんと言えよ」

「ああ、もう過去に戻り始めたか。安心しろなんとかなるお前ならだつてなんとかなる」

「だから、聞こえないって！」

「ああ、最後にお前の言つてた彼女の名前を、教えてやる。彼女は確か　セシル。　　になつてゐるから助けてやれ」

重要な部分があんまり聞き取れなかったな。と思いながら男は意識を失つた。

1話

巨大な石垣で周りを固めて、外からは何も見えないようにしている場所があった。

石垣の向こうには灰色の何かとても硬い物で固められた建物が建っていた。勿論その建物の中は何も見えない。窓1つとないのだ。そして建物の中は何者かを出さないためなのか、理由はわからないが中は迷路のような構造になっている。

その迷路のような中の道を進みさらに分散されている道の奥の奥に男……いや、少年はいた。

その実験施設の中で両手を鎖で前に繋がれて拘束されている少年の体の中にドクンという音が鳴り響いた。

その体の中に男の記憶が移ったのである。代わりに今までの少年の記憶、人格も吹き飛んでしまった。

少年身体を乗っ取った……と言ってもいいが、別にこのまま放っておいても大量殺人犯になるだけなので、元男は悪い気はしなかった。

少しの間自分がどういう状況でこうなったかということを思い出

すのにしばらくかかったが、あの女の手の光を見ていたら過去こつに来たということ以外は思い出せなかった。

意識が大分覚めて来た頃に、自分の状態がかなり不思議なことに気が付いた。

止まっているのだ。

多分これはあの女が自分の状況を把握する為に用意してくれたものだろうと予想しておく。

周りも止まっているが、自分も止まっているらしい。身体を動かすことは不可能だった。

周りに自分を囲んでいる者達がいた。周りの風景からここは実験施設だとわかったので、研究者だろうと悟った。ここに来て意識を保っていた時間は魔法と武術を教え込まれた時とかなり長い時間だったので、記憶が焼き付いていたらしい。

ゆっくり周りの状況を確認していくと、今自分が置かれている状況も段々とわかってきた。

まず自分はどれほど過去に戻ったかということだ。

これだけの研究者たちがいるということはもう自分は親に売られて研究施設けんしつに来たということははっきりしているし、まだ実験が開始されていないということから、確か16歳くらだったということもわかった。

しかし……と少年は頭を悩ます。

これだけの人数の人間がいて、しかも自分は手を拘束されている状態でどうやってこの状況から逃げ出そうかと。

そつえば、と自分の魔法の力や身体能力はどうなっているのかと疑問に思った。

だが今はまだ周りが止まった状態なので、どうすることも出来ない。もし能力が16歳このときの身体の状態のままだったらという可能性もあるのだ、他の方法も考えることにした。

が、大体15年も前のことなんてそんなにはっきりと覚えている

わけがない。これだけの周りを見てここまでわかったのが逆に驚きだ。とこの後の展開を思い出すのを放棄した。あとは周りの時間が動き出すのを待つばかりである。

「おいおい、いきなり黙ってどうしたんだ？」

周りの研究員が話しかけて来たので、時間が動き出したのがわかった。

「もしかして、俺達にびびって言葉もなくなっちまったか？」

うえへへ！ という下品な笑い声があがるが、少年は特に気にした様子もなく黙っていた。

「ちつ。なんだこの餓鬼。さっきまで喚いてたくせによ」
「きつと恐怖で怯えきつちまったんだって！ そっとしておいてやれよ！」

恐怖で怯える……ということは実験内容を俺に話したところなのだろうか？ と心の中で考察する。これ以外に恐怖というものは思いつかなかったのだ。

自分の首を動かせるようになったので、周りの研究者たちの数をざっと見て確認する。大体6、7人くらいだ。

「それじゃあ悪いが、眠ってもらおうか」

それは少しまずい。と心の中では焦ってはいたが表情にはださなようにしていた。

研究者が何やら注射見たいな物を手に持って、少年に近付いてきた。

ここは一か八か鎖を引きちぎれるかやってみるしかないと考えて力を込めた。

「！？ 研究長！ あの検体が鎖を引きちぎりました！」

「そんなことはわかっている！ さっさと押さえろ！」

「はっ！」

手首をかなり痛めたが少年はなんとか鎖を引きちぎることに成功した。

あとは周りの研究者たちを殺せば少しの間は安心できると考え、周りの研究者を襲い始めた。

「ぐぐ！？」

まず手近にいた研究者を殴り飛ばした。

周りの奴らが茫然としている間に何人仕留められるかが勝負だ。

それにしてもただ殴っただけで手がかなり痛い。少し力を加減する必要があるそうだ。

これが生身の体なのかと実感しながらも、前の体はどんなに強力だったか改めて思い知った。

「一旦引け！ そうしたらこの空間に催眠ガスを……」

その言葉の続きを研究員が言うことはできなかった。なぜなら少年がその男の顔を殴り、吹き飛ばしたからである。

今は手の痛みを気にしていられる状況ではないので、今出せる限りの力で周りの研究員たちを殴った。

すると周りの研究者たちも状況が判断できるようになって来たのか、逃げて行く奴らがほとんど、いや全員だった。

ここで魔法は使えるのかどうかを試して見ようと思った。

最上級魔法術を使えばほとんど敵なしということはあるが、ここで使って異変に気が付いたやるが、違うフロアから増援が来ると厄介なので、下級魔法術を使えるか試して見ることにした。

「ロアグレート下級魔法術 ディフジオン分裂魔法 『クインティル五本の棘』」

紫色の小さな魔法陣が5つ目の前に現れ、魔法陣の中心から緑色の光線が5本飛んでいき逃げようとしている研究員たちに向かい、その胸を貫いた。

研究員たちは悲鳴をあげる暇もなく、口から血を吐きだしながら絶命した。

「とりあえず……だな」

戦闘したというのに、自分の意識が保てていることに少々違和感を感じながら少年は息をついた。

「さてと、ここからどうしようか……」

とりあえず最初にやることはこの研究施設から脱出することだとは決めていたが、少年は折角過去に戻って来たのだから、他のことをやってから逃げるというのも手だと思っていたのだ。

このまま1人で脱出するのもいいが、過去の自分と同じような目にあっている人はたくさんいたはずなので、その人たちを助けてから脱出するのでもいいかもしれない。

少年が色々と悩んでいた時にいきなりガコン！ と音がして、何かが動いているような音が鳴り響いた。その音は研究員の死体がある少し先の壁から鳴り響いていた。

「おいおいおい！ なんじゃこりゃあ!？」

壁から少し低めの声が聞こえた。

「まさか、実験が失敗していたとは……面白い！」

壁がくるりと反転して、そこから普通の人より一回りくらい大きく、やたらと筋肉質な男が出て来た。

「そこが隠し扉だったわけか」

「なんだよ、俺には目もくれないってかあ？」

男がにやにやしながらこちらへと距離を詰めてくる。

「にしても、間抜けな奴らだよな！ こいつら研究材料に殺されたんだぜ？」

「全くその通りだ」

筋肉質の男が死体を見て言うと、後ろから無愛想な男の声が聞こえた。

もう1人いるとはわからなかったので、少し驚いた。

しかし、姿は見えていない。

「お前は上にこのことを報告してこい。俺はこの材料を廃棄するつてな」

「わかった」

そう言つと無愛想な声の男が後ろの隠し扉に向かう背中だけ少し見えた。

背が低く、帽子を被っていることしか見えなかった。髪の毛がはみ出ていなかったの、そんなに髪の毛は長くないようだ。

そしてなぜか目の前の男は自らの上着を引きちぎった。腹筋が割れている。

「それじゃ、てめえには死んでもらおうか!!」

筋肉質の男が少年に向かってかなりのスピードで向かってくる。と言っても前の世界にいた少年とは比べ物にならないほどの速さだが。少年の反射神経は引き継がれていたようで、その動きにはちゃんと対応できた。だが、体の動きは前の世界よりは遅くなっている。で少々危なかった。

男は少年の顔を狙っていたようなので体を横にずらしてかわし、そこから男の腹に向かって殴り、その瞬間後ろにバク転して距離を取った。

今回は様子見という感じで全力の力では殴らなかった。

「ほう！ 結構やるようだな！ 俺の予想では今の1撃で終わっていたんだがな。それに、今の拳結構効いたぜ」

そう言いながら男は笑っていた。戦いを楽しんでいる様子だ。

「まあまあ出来るようだし、本気でいっか!」

先ほどこちらに向かって来たときと同じくらいの速さで男はタックルする形で突進してきた。

このまま後ろに下がって避けることは難しいので、横にずれて回避。そこで魔法を使おうとしたが、男が早くて呪文を唱えることが出来ない。

魔法にも弱点があるのだ。

それは近くの敵には当てることが難しいことと、威力が高ければ高い程使う前と使ったあとに出来る長い隙だ。

それに、魔法を唱えている間はほとんど動かないことが原則なのである。なぜならば、移動しながら使おうと詠唱に集中できずに威力が落ちるからである。

あと魔法を撃った後には少し反動があり、それも大きな隙になりかねないのである。

つまり相手が移動に特化している場合ほとんど魔法を使うわけにはいかないし、移動しながら使った所で当たらなければ意味がないし威力も落ちるので基本は接近戦になる。

なので基本魔法使いは後方支援としてしか戦闘には参加することはなく、接近戦で魔法を使う者はほとんどいない。

「面倒な」

「は！？ お前まさかこの俺に勝つ気でいるのかよ！」

返事はしない。

身体が人間に戻ったので、体力は底なしではなくなったからである。

一々返事を返した所で生き残れる可能性が高くなることなんてないだろうから。

とは言っても話をしても無駄ではないところでは話すだろうが。

「こんのおおおおおおおお！！！」

男が気合いと共に少年に向けて回し蹴りをした。勿論反応することとは容易だったが、やはり体が付いてこない。それでも躲すことは出来たので男は少年に対して隙を作っただけであった。

今度はお返しとばかりに少年が回し蹴りを男の腹に打ち込んだ。しかし、その瞬間おかしなことが起きた。逆に少年が吹き飛ばされて床に打ち付けられたのだ。

打ち付けられた瞬間に追撃されると思って、すぐに床から痛む体

を起こし男の姿を確認した。

男はにんまりとした顔で少年を見ていた。

今の反撃によって男は少年から主導権を取ったと思っているらしい。

「……お前まさか反射使用カウンターか？」

「よく知ってるじゃねーか……」

男は少年に自分のことがばれてにんまり笑いが消えた。

反射使用カウンターとは防御魔法を相手の攻撃が当たる瞬間に使った時に起こる反射物理攻撃防御魔法術（元の攻撃の2倍の威力が相手に跳ね返る）を使える人のことを言う。

防御魔法は魔法使用者の前に見えない盾をだす呪文である。

もちろん防御魔法を攻撃が当たる前に使っておいて相手の攻撃を防ぐことも出来る。

防御魔法は呪文を唱えないで使えるので、便利である。

一見防御魔法はかなり優れた魔法にも思えるが、この魔法には落とし穴がある。防げる力よりも大きな威力の攻撃を食らうと当然だが一防御魔法（見えない盾）は砕けてしまう。

防御魔法は砕けるとすぐさま周囲の物と同調して、再び見えない盾を作ろうとする性質がある。これが厄介なのだ。

破壊された盾の1番近くにあるものは、盾を破壊した物であるからその破壊した物に同調しはじめてしまうのである。

そうすると防御魔法を砕いた攻撃に防御魔法の力も加わって自らに襲いかかって来るのである。つまり防御魔法で防げなかった攻撃は、さらに防御魔法での力も加算されて襲ってくることになってしまうのだ。

それに防御魔法は消費する魔力の量が多いので、後方支援の普通の魔法使いはあまり使うことはない。

接近戦を主体としている者にとってはかなり使い勝手のよいものになる。魔力の消費を気にすることなく戦えるというのが理由の1つだ。

ちなみに魔法を反射出来たとしても、魔法自体に威力が跳ね返るだけで相手にまで攻撃が跳ね返らないので意味がない。

「お前は最初の1撃を防がなかったのはわざとか？　それで俺が油断したときにこの防御魔法の反射使って一気に畳込む気だったのか？」

「よくわかるな。だが1撃目は本当に受けたのさ。防がなかったのではなくて、防げなかった」

少年は男が答えを教えてくれるので自分が言ったことが正解だということがわかった。もしかしたら、少年を勘違いさせる為に嘘をついて言っているかもしれないが。

少年は体を起こしながら自らの身体の痛みに苛立った。昔ならばこんな衝撃はすぐに治ったのだが、今は人の体なのでそうもいかないようである。

それに自分の攻撃力の倍のダメージを食らったので、人間の体では少々堪えた。

「なるほど。防げる場所が一定でないというならば最初から俺の攻撃を防いでいたと。ならお前は1部分しか防御出来ない下級の防御魔法しか使えないってわけか？」

「何もかもお見通しってわけか。てめえ何者だ？」

「さあな。未来から来た化け物って感じかな？　にしても、魔法を使える奴だったとは思わなかったぜ」

魔法は何もしないと使えない。だが、魔法を絶対に使えない人間はいない。ただ使えるように努力しただけである。

なぜなら、魔法を使えるようになるまでは本当に大変な練習をしなければいけないからである。

魔法は1年2年と鍛えていくとやっと下級魔法が使えるようになる程度である。それも最初の方の威力は壁を少し焦がすくらいの威力だ。

そこからさらに鍛えていくと中級、上級魔法と使えるようになっていくのだが、ほとんどの人間は魔法を使えるようになるまでは鍛えない。なぜなら初めて魔法を使えるようになるまで最低でも1年間は必要とするし、実践で使えるようになるのはそこからさらに4、5年は鍛えないと戦闘では使えないからである。

少年は前の世界に居た時に無理矢理魔法を使えるようにされたので、苦労を知っている。なので目の前にいる男が魔法を使えることに驚いていた。

「お前みたいな筋肉馬鹿には、魔法は必要ないようにも見えるんだがな」

「ふざけやがって!」

男が再び少年に向かって突進してくる。体は痛い、動かせない程ではない。

「さあどうする!? お前の攻撃はもう効かないぜ!」

「言っておくが、お前だけが防御魔法プロットを使えるってわけじゃ、ねえんだよ!」

男が少年にぶつかる瞬間に男は逆の方に吹き飛んだ。少年も男に対して反射物理攻撃防御魔法を使ったのである。

「な、なぜ……俺はお前の複数箇所**に**ぶつかったんだぞ」

「絶対不可侵の領域。お前は俺の領域に踏み込んだ。ただ、それだ

けだ」

セニオード

「上級魔法術だ！？ それに、俺の攻撃を防いだ……な、なんでお前みたいな小僧が……」

「子供だと思つて、油断したか？」

「くそがあああ！！」

男は喚きながら少年に殴りかかる。しかしその攻撃はやはり当てることなく逆に少年に反撃されてしまう。

そしてそれを男が反射物理防御魔法で跳ね返した瞬間にまたおかしなことが起きた。

反射物理防御魔法術で跳ね返したはずの少年の攻撃の威力が、倍以上になって自分に跳ね返って来たのである。

男は衝撃で地面に転がり、尻餅をついた状態で少年の方を見ていた。

「げほ……な、なんで跳ね返らねえんだ……」

「その反射物理防御魔法術をさらに反射物理防御魔法術で跳ね返したんだ。まあ、難しいからお勧めはしないけどな」

通常反射物理防御魔法術をさらに反射物理防御魔法術で跳ね返すなんてことはありえないのだが、少年の前の世界で鍛えた反射神経がそれを可能にしていた。

男は尻餅をついたまま後ずさった。それが命取りと知らずに。

少年はチャンスとばかりに魔法を詠唱する。

インタデメリー

「中級魔法術

ディブシオン

分裂魔法

ウンデカル

『十一の剣』

」

白くて縦に長く、四角形な魔法陣が少年の目の前に現れてそこから11本の白い何かが男に向かって発射された。

「うわあああ！ くそつたれが！」

男は急いで立ち上がり、後ろに逃げながら1本2本の攻撃を防御魔法で防いだようだが、それ以外は防げず、自らの体に魔法が突き刺さり床に倒れた。意識を失ったかどうかはわからないが、かなりの深手を負ったのは間違いなかった。

「おかしいな……魔法の威力が前よりも下がっている？ ……とりあえず、他の応援が来る前に、脱出するでしょう」

少年はとりあえず、ここから逃げ出すことにした。

2話（前書き）

遅くなつてごめんなさい

2話

少し床に打ち付けられただけで痛む体に苛立ちを覚えながら少年は周りを見回した。

少年はさっき倒した筋肉質の男がさっきここに来る前に帽子を被った男に言った言葉を思い出していた。

確かあの時は男が帽子男に俺はこいつを殺すからそれを伝えてこいという感じのことを言っていたのでしばらくの間はここに居ても大丈夫だろうと思った。

しかし、あまり長くいることは出来ないだろう。あの帽子の男だって時間が経って筋肉質の男が帰って来なかったら怪しく思うだろう。

この部屋から出る場所はわかっていたが、他に何かないかを探していた。

あそこから普通に通ってもいいが今地面に倒れている男がそこから来たことを考えると、あまりそこから通りたくはなかった。

こいつが現れたのは隠し扉らしき壁からなので、他にも扉がないかを探すことにした。体が痛んでいたので、少し壁によしかかる感じになっていた。

「無駄だ」

さっき倒した筋肉質の男が話しかけてきた。どうやら意識は失っていないかったらしい。

「なんだよ」

「他の扉を探しても無駄だと言ったんだ」

「そうかい。って俺に教えてもいいのか？」

「やられた身だからな。もう動けやしねえよ」

男はそういいながら顔だけを前に向けた。

「それより、俺には止め刺さなくていいのか」

「ああ。お前には特に恨みがあるわけでもないからな」

「こいつらには何か恨みがあつたのか？」

こいつらというのは研究者たちと予想して答える。

「ああ、こいつらは俺を酷いめに遭わせてくれたからな」

少年は男の言葉を信用していないかのように壁を入念に調べていた。

「お前……」

「なんだよ」

「まだ脱出諦めてねえんだったら、さつさと俺が来た所から逃げやがれ」

「うるせえな……人のことは放っておいて、自分のことでも心配してやがれ」

本来ならば意識を失ってもおかしくない程のダメージを負っているはずなのだが、床に倒れている男は自身のかなり質のいい筋肉のおかげで致命傷にはならなかったらしい。

「ここがどこだかわかってんだろ？ 奴隷収容所って名前だが、本

当は人体実験をしている施設で

「ロアクレイデ ストレート センチタリム
黙れ。下級 直線魔法 『貫く槍』」

少年が手を床に倒れている男に向けると素早く黄色い小さな魔法陣が現れ、男の方に1本の短い光線が男の頭の少し前の方に突き刺さり、その衝撃で男はまた吹き飛ばされた。

「うおおおお！？」

「ちっ……はずしたか」

「容赦ねえな！？」

「敵に容赦しない奴なんているのか？」

「それも……そうか」

「ああ、お前言いかけてたことだが。俺は全てを知っている。ここが人体実験場だってこともここを作ったのが聖都アクナシヤだってこともな」

「……それで、めえはどうするつもりなんだよ」

「とりあえずここからは脱出する。それからには特に考えてないし、考えていたとしてもお前なんかに教えねえよ」

「それも……そうだな」

少年は何か自らの拳と魔法以外の武器。剣などが欲しくなった。いくら下級魔法だからと言って、何回も使っていたら魔法使う力がなくなってしまうし、少年は格闘よりも剣術の方が得意なのである。

一通り隠し扉以外の壁を調べたが、特に変わったものはなく時間の無駄だったらしい。

「正面突破しか道はないのか」

「だろうな。てめえの命もきつとそこで終わりだ」

「お前が俺の運命を決めるなカス野郎。悪いが俺はまだまだ死ねない身なんだね」

少年は隠し扉を通り進んだ。

男は後ろの方で何か言っていた気がしたが、特に気にもしなかった。

進んだ先にあったのはエレベーターのような物で、ボタンを押せばその場所まで登って行くことが出来るらしい。

階数を確認しようと、上の方を見ると数字が21までであった。しかし順番は番号順ではなく、ばらばらだった。

「……どこが出口なんだ」

ここの階は15の数字が見えるが、実際は15階なのかどうかも怪しい。なぜなら、次の階は3階だからである。

「仕方ないから適当に行ってみるか」

多分1回このエレベーターを動かしたとしても少年を殺そうとしていた男が動かしているのだと思って、特に気にもされることなく少年はエレベーターを使えるであろう。

少年はエレベーターに乗り込み、適当に次の階の3を押した。

するとエレベーターは少し上に動いてから横に動いて、そこからさらに上に進み始めた。

横に移動するとは思っていなかったので、少年は若干よろめきはしたが、転ぶことはなかった。

「まさか、横に動くとは思わなかった」

しかも1つ上の数字を押しただけで横に動いたり上に2回も動い

ている。昔はこんな所をどうやって通っていたのかも少年の記憶にはない。

ガクン！ と音がして扉が開くのかと思いきや、今度は下に降下する感じがした。

チーンという音がして、今度こそ扉が開いた。

エレベーターを降りた部屋に出口らしきものが見当たらなかった。周りにはただ剣や銃などが置いてある。多分武器庫か何かなのだろう。

少年は普通の状況だったならば喜んだ。自らが欲していた剣がそこには揃っているのだから。

しかし、そこにはそれ以外のいらない物まであったので、少年は素直には喜んでゐる暇もなかった。

なぜなら、武装した兵士らしき奴らが少年の方を見て武器を構えて待っていたらしい。ほとんどの兵士が銃をこちらへ向けている。

「……へ？」

「実験体152、戦闘部隊の副長からお前が逃げ出したと連絡を受けて、貴方を処刑しに来ました」

「……嘘だろ」

兵士たちの代表らしき奴が1歩前に出て少年に宣言した。

副長というのはさっき倒した男だろうか？ と少年は疑問に思った。もしそうならば、止めを刺しておけばよかったとも思った。

ざっと兵士の数を数えると大体20人以上はいるようだ。しかも相手は武装しているので素手でダメージを与えるのは難しいだろう。兵士の中に剣を持っている兵士がいたので、奪い取りたいと少年は考えていた。

後ろの方に立てかけてある剣を取りに行く暇はないと思っていた

からだ。

「実験体。抵抗しないのであれば、楽に死なさせてやるぞ」

「……1つ聞こう。エレベーターを弄ったのは貴様らか？」

「勿論そうだ。あの装置が我らが操作しないで、あんな動きをするわけないだろう」

つまりこの兵士たちを全て片付けてからではないと、先には進めないということであろう。

「わかった。ならば、死んでもらおうか」

「！！」

少年はその場で静止したまま手を兵士の方へと向けた。

インタデメリー ストレート
「中級魔法術 直線魔法 『絶望の闇』」

「まずい！ 撤退しろ！」

少年の手のひらから黒い紋章が浮き上がり、紋章から暗い闇が溢れて部屋全体が闇に包まれていく。

「うおおおおおおお！！！」

やけくそ気味の兵士5、6人が自らが武装している銃で闇に向かって撃っているが、全ての弾が吸収されるだけで闇の勢いは止まらない。

「無駄だ。魔法に対抗するには、もっと強い力じゃないと」

「無茶だ！ 魔法が使えるだなんて、報告にないぞ！？」

兵士たちは成すがままに闇に飲み込まれていき、悲鳴をあげたりするだけで、少年を処刑しに来ている者たちとは到底思えなかった。少年の心の中に、もしかしたら自分の情報が正しく伝わってなく、わざと魔法を使えない奴らだけで来た。という考えがだが油断はしなかった。

「早く魔力拡散弾を撃て！！」

そう兵士の代表らしき人物が回りに指示をした。

代表というより、周りに命令を下したりもしているのでリーダー格とも言った方が良さそうだろうか。

兵士たちが少年の放った魔法に魔力拡散弾を撃ち込んでいくと、段々と魔法が分散していった。

「ああ」

少年は思い出したように言った。

「そういえば、昔魔法も使えない凡人共が魔法使いに対抗するために作り出した兵器つてのがあったな」

「貴様……！ 我らを愚弄するか！？」

「いや。そんな奴らの無駄な足掻きを思い出して憐れんでるんだよ」
「この……クソガキがああああ！！」

リーダー格の兵士が俺に向かって銃を撃ってくる。

もちろん魔法でガードすることも出来るだろうが、防ぐ必要もないので躲すことにした。

「んな……銃弾を躲しただと？」

「そんなことに一々驚いていて、隙を作っていないのか？」

「!？」

と声では余裕そうに装ってはいたが、実際は反応出来ていても体が付いてこないの、ギリギリ躲けたという感じであった。

リーダー格の男が茫然としている間に少年はもうその男の隣にいた。

そして少年は男の顔面を思いっきり殴り飛ばした。

「ぐああ！」

ドン！ と男は壁にぶつかり気を失ったらしい。だが、少年はまだ攻撃をやめることはない。

「ログアデーレ下級魔法 ストレート直線魔法 『センチタリム貫く槍』」

ひゅんという音が聞こえたかと思うと、リーダー格の男が気を失っている方に向かってさらに魔法が放たれていた。

「そんな！ 長！」

「なんでだよ……なんでそんなに容赦がねえんだ！」

さっきまで多数対1で少年を処刑しようとしていた奴らが言う言葉ではないような気がするが、少年は黙っていた。あとは残りの2、3人の兵士を倒せば終わりである。

少年はまず剣を持っている兵士を狙った。

少年の移動スピードは前の世界の時より落ちているとは言え、一般の人間から見ればかなり速いので兵士たちは動きに付いて行くことが出来ない。多少訓練しているとはいえ、前の世界の少年と比べれば全くしていないと言っているほどだろう。

剣を持っている兵士の脇腹を殴ると、呻きながら倒れ兵士は剣を地面に落とした。それを少年が軽々と拾う。

「うーん。久しぶりの剣だな」

少年の興味は剣の方に向けられて、まるで周りにもう敵はいないかのように振る舞っている。脇腹を殴られた兵士はその場に蹲つすくまっていた。

「切れ味はどんなものなんだろうか」

少年はまるで日常の中にいる害虫を殺すかのように、何のためらいもなく近くにいた兵士の首を斬り飛ばした。

「え……」

残っていた兵士が思わず声にだしていた。

「うーん。まあ一般の兵士が持っている剣だし、これくらいの強度なのかなあ……」

少年が振った剣をよく見ると若干だが剣が欠けていた。

「さて、と」

「うわあああああああああ!!」

少年の言葉を聞いて次は自分だと思った兵士が発狂しながら銃を乱射した。少年は慌てず自分にあたる弾だけ剣で弾き、兵士に近付いていた。

そして兵士が銃を両手で構えているので下から上に向けて剣を斬

りあげて兵士の手を斬り落とした。

「あ、ああああ、ああああ――！」

自らの手が斬られた衝撃と感覚で情けない声をだしている兵士を少年は構わず蹴り飛ばした。蹴りの威力はそれほどなく、兵士を黙らせたただけであった。

だが少年はそれで満足したようで他の兵士がいなか周りを見回した。

「あれ？」

少年の感ではあと最低でも1人の兵士がいたはずなのだが、なぜか兵士の姿が見当たらなかった。

もしかしたら、最初の闇の魔法に吸い込まれてどこかへ消えてしまったのかもしれない。

これで少しゆっくり剣を選べるなどと思いながら少年は剣がある場所へ歩いていった。

ほとんどの剣が自分が放った魔法で折れたり、砕けたり、中には消滅しているものもあったが、ちゃんと形を保っている剣がたくさんあった。

今少年が手にしている剣も兵士が持っていたので、結構良い剣なのだろうが、たった1撃で欠けるような剣はあまり役に立たなさそうだったので、変わりの剣も探しておくことにした。

前の世界ならば、剣を5本程度背負っていても全くと言っていいほど影響がなかったが、今の状態では2本背負うのが限界だろうと思ひ、少年は適当に剣を1本背中に背負った。

この中にあるものならば、大して1本1本に変わりはないと思っただからである。

と、少年が剣を背負って歩き出した瞬間少年は地面に倒れてしまった。

先ほどの男との戦いで受けた反射物理防御魔法術で食らったダメージがかなり残っていたようだ。

「やっぱり……自分の力は痛いな」

少年は負担を少しでも減らすために背中に背負った剣を壁の方に投げて捨てた。

折角拾ったのに、と少年は思ったが自分の体の方が大事なので仕方なくそうした。

そして、少年はゆっくりとエレベーターの方に戻って行った。

3話 連れが1人増えた（前書き）

今回は書きたかった話の1つなので、ちょっと長いかもね

3話 連れが1人増えた

「待てよ……」

少年はエレベーターに乗ろうとしたが、足を止めた。

「このまままたエレベーターに乗ったら罠に仕掛けられるとか、そういう感じなのか？」

でもさっきは連絡がいつて、兵士たちがこちらに対して仕掛けて来たのでまた兵士がやられるなんて思っではないはず。

それなら今度こそ1回くらい弄っても大丈夫ではないかと思い、少年はエレベーターの中に入った。

だが入ったと同時にエレベーターが勝手に動きだした。

「やっぱり、そういう感じなのかねえ……」

少年は諦めたように独り言をいった。エレベーターはどんどんと上に向かってあがって行く。どうやら行き場所は上の階らしい。

エレベーターの中ではガコンガコンという音以外は何も聞こえず、突然どこからか攻撃が飛んで来るなんてことはなさそうだった。

それでもいきなり攻撃が来ないという保証はないので剣は手に持ったままにしておいた。

「お」

チーンという音がして扉が開いた。どうやら目的の場所に着いたらしい。

少年がエレベーターから降りるとまた大きな部屋だった。

そこは少し前2部屋とは違う感じだった。

部屋の周りには水槽があり魚が泳いでいた。

そして部屋の奥には手を鎖で縛られ、磔られている少女がいた。体はあちこち汚れていて、髪が銀髪。結構少年と距離は離れていた
ので、その他詳しいことはよくわからなかった。

「美しいだろう?」

「!?!」

少年が声のした方を向くと水槽のある所に寄りかかっている男がいた。

紅いメガネを掛けて、少し黄色めの髪。服装は全て黒く、コートが摩^{なび}いていた。

風もないのにどうして? と少年は思ったが、とりあえず目の前にいる怪しい男を警戒していた。

「あの少女は精霊魔法使いだ。手に入れるのに苦労したよ」

「……」

「無視か。それもいい。ただ黙って聞いてくれるだけでもね」

少年は目の前の黒い男を警戒しながらも話に耳を傾けていた。

「実験体152、君は実に面白い」

男がぱちん! と指を鳴らすと鎖で縛られている少女の上の壁がずれて、画面が出て来た。

「このモニターから君を全て見ていたよ。いきなり研究員を殺しはじめたり、一応ここの戦闘部隊の副隊長を圧倒する姿も……ね」

「あんな奴が戦闘部隊の副隊長とは、笑わせるよ」

「君からしたらそうだろうね。にしても、本当に君は面白い。魔法の力にしても格闘にしても全てが私の予想以上だ。一体何時^{いつ}そんな技術を手に入れたんだい？ 私が見ていた中じゃ君はここに来るまでは全くと言っていいほど力がなかった。なのに君はいきなり力だけで鎖を引きちぎった。魔法も使った。なぜここに連れて来られる前から使わなかったのか、それとも使えなかったのか。疑問は山ほどある」

「さあな。未来の俺からの、贈り物かもな」

「未来の君の力かい？ ククク……面白いことを言うじゃないか」

「ここには俺以外にも子供や実験対象が、いるんだろ？」

「正しく言うならば、この近くだがね。この精霊魔法師の少女もその1人だ。中々ガードが硬くて困っているのさ」

「……そうか、で、この部屋に俺を連れてきたのはお前なんだろ？」

「直接会って話して見たかったからね。君は期待通りだった」

「話すだけが目的だったなら、もう出て行ってもいいか？」

「それは困る。君は私達にとっても重要な存在だからね。大人しく改造されないか？」

「お断りだ、糞野郎」

「それなら仕方がない。力で支配させてもらうよ」
「！」

黒い男がそう言った瞬間にはもう少年の後ろに来て蹴りの構えを取っていた。少年はその蹴りを反射物理防御魔法術で跳ね返すことにした。

「かあっ！」

男が掛け声とともに蹴りを放つ。タイミングよく防御魔法を発動。だが衝撃が来ない。不審に思った瞬間に衝撃が来た。しかし自らの体に蹴りが当たる衝撃だった。

「……っ！」

蹴り飛ばされながらも体制を整える。

そして自分の防御魔法が相手のただの蹴りで破られたことに驚いた。

「ふむ……その対応速度も素晴らしい。だが、まだ私でも勝てそうだな」

「何しやがった……」

「君が反射物理防御魔法術で攻撃を跳ね返そうとしていることはわかっていて。だからタイミングをずらして君の防御魔法を貫いて君にダメージを与えただけさ」

「ただの打撃で上級魔法が壊されるのか……？」

「そこらを理解していないところを見ると、まだまだだということだね」

「っ！ 黙れ！ エクストラ 最上級魔法術 ストレート 直線魔法 『キサグラム 六芒星』 ！！」

「ほうっ！」

「んな！？」

少年は驚いた。

何に驚いたかというと自身が放った最上級魔法に。

なぜかと言うと前の世界で使っていた魔法の大きさの、約半分く

らの大きさになっていたからである。

これでは前の世界にいた時に使っていた上級魔法より少し力が大きいくらいである。

「んん？ 驚くということは、予想外の何かが起こったようだね。
でも、ここからがさらに予想外だと思うよ。 下級魔法術 ロアグレデー ストレ 直線魔
法 セントタリム 『貫く槍』」

男は少年の言葉を聞きながら、最上級魔法に対して下級魔法で対応した。

少年は例え少し力がなくなったからと言って、最上級魔法が下級魔法に負けるとは思っていないので、少しだけ気を緩めた……のだが。

「！」

少年の最上級魔法は男の放った下級魔法によって貫かれていた。そしてその魔法は最上級魔法を貫くだけではなく、少年を貫く勢いで体の中心へと飛んで来ていた。

慌てて身を横に移動させようとするが、最上級魔法を使った反動で少し体の動きが鈍かった。が、なんとか中心に当たることはなく、左肩を貫かれただけで済んだ。

少年の魔法と男の魔法を比べると男の魔法の方が圧倒的に小さいので、少年の魔法は貫かれていない場所もある。ただ男は無傷でそこに立っていた。男の後ろの方で少年の魔法が壁にぶつかり壁を壊した。どうやらこの部屋の壁は魔法耐性があるようで少ししか壊れなかった。

「まさか最上級魔法が下級魔法に貫かれるとはな……」

「君の魔法には多少だが弱い所が見えるのでね。そこを突けば簡単にいなすことが出来る。力だけが全てではない。小さき力でも1点に集中させれば大きな力となる」

「なんだよそれ、アドバースか？」

「似たようなものさ」

どうやら前の世界よりもかなり魔法の力が弱くなっているらしい。少年は魔法では目の前の男には勝てないと思い剣で戦うことにした。

「今度は剣か。とことん付き合ってやろう」

男も見えない所から黒い剣を出した。

何かカラクリがあるのかもしれない。もしくは、この世界では自分でも知らない魔法があるのかと色々と疑問に思うこともあったが、目の前の男に集中することにした。

「はあああ!!」

「むん!!」

少年の横からの重い1撃を男が黒い剣で受け止める。少年は片手で剣を持ち、男は両手で剣を持っていた。

少年は力を込めて男をそのまま斬り伏せるつもりだったが、男の方が力が強く、逆に押され気味だった。

少年はこのままだと勝てないと思い、力を抜いて下がった。そして男が少し前へ乗り出す瞬間を狙い剣で首を狙い斬りつけた。

ガン！ という音が鳴り少年は後ろへと吹き飛ばされた。

吹き飛ばされている時に、自分は反射物理防御魔法術を食らったのだと悟った。剣は碎けてしまった。

しかし剣だけが反射物理防御魔法術に当たったので、体にはそれほどダメージがなかった。

「中々いいが、私もこれくらいなら使えるということを忘れて貰っては困る」

少年は息が切れていた。

男と戦う前にも少し攻撃を食らっていたし、ここに来て生身で攻撃を2回程受けていたのも原因だが今の少年の体は体力が少ないのである。

16歳の平均的な体力はあるものの、生身になったことで攻撃で痛みを感じるといふ緊張感がかなり神経をとがらせていて、さらに体力を削っていた。

さきほど魔法で貫かれた左肩は当然だがかなり痛んでいる。

「休んでいる暇はない」

「!？」

少年は男の様子を窺っていたのだが、男の速さが少年よりもかなり速く反応することすらギリギリだった。

いきなり目の前に現れた（ように見えた）男が蹴りで少年を蹴り飛ばした。なんとか手でガードすることは出来たが、防御魔法を出すことまでは出来ず吹き飛ばされて鎖で繋がれている少女がいる上の方の壁にぶつかった。

「くそ……体中の痛みが消えないってこんな

ロアグレイデ デイブシオン クインティル
「下級魔法術 分裂魔法 『五本の棘』」

「うああああああ!!」

壁にぶつかって止まっているところに男が魔法で追い打ちを掛け

てきた。

少年は体を捻って躲そうとするが相手の魔法（5発飛んできている）を全て躲すことは出来ず、片足に2発食らってしまった。

「うぐ……」

そして上の壁から下の床まで少年は落ちてしまった。防御魔法を使おうとしたがうまくいかなかったようで、かなり体のダメージが酷かった。

男が少年のすぐ前に立っていた。少年はうつ伏せに倒れたままである。

「そろそろお休みの時間かな？」

「ふざけんなよ……三下があー!!」

「ふむ、そう言うなら私を倒してからにしたまえ」

魔法が当たらなかった方の足で勢いをつけて男に向かって体当たりしに向かう。そんなことをしても無駄だとはわかっていたが、体が痛くてそれしか出来なかった。

「ただ直線に突っ込んできても当たらんぞ」

男は横によけて少年をかわす。

ここまで予想していた少年は男のいた場所で自身の体を止め、そこから回し蹴りをした。

「むうつ!!」

男はこれが予想外だったらしく、蹴りを受け止め自分から距離を離してくれた。

少年は手を男の方に向けた。これが最後のチャンスだな、と思いつながら。

「エクストラ最上級魔法術 ストレート直線魔法 『キサグラム六芒星』！」

呪文を唱えた。

が、手のひらに紋章は出ない。

「!？」

「ははははは!! 君にも限界があるんじゃないか! どうやら魔法を使えなくなってようだね」

終わった……。

少年は悟った。

またあの世界のように精神が狂うんだ。そしてまたこの世界も元の世界のようになる……。

結局ここに帰って来た意味はなかった。元の世界で死んでいた方がましだったかもしれないという考えが少年の心を支配していく。

「そろそろ寝たまえ。君は十分にやった」

いつの間にか周りこんでいた男に後ろから蹴られる。身構えていなかったたので人形のように吹き飛ばされた。

そして少女が鎖で縛られている近くまで来て、やっと止まった。これで体が全く動かなくなった。意識はあるが、何も出来ないことには変わらない。

「回収班。私だ。すぐ部屋に来てくれ。あと清掃」

男がどこかへ向かって連絡を取っているらしい。今となってはど

うでもいいが。

「諦めるの？」

かなり小さい声だった。それが少女の発した声だと気が付くのに少し時間がかかった。

「諦めたくはない。でも無理なんだ」

少年も小さい声でかえす。いや、小さい声しか出せないと言った方正しい。

「どうして？」

少女が聞き返してくる。少年は自分の状況を見てわからないのか？と少し苛立ったがこれが最後の会話となるかもしれないので、黙っていた。

「体が動かない」

「どうして？」

「見てみるよ……体中傷だらけで動きたくても動けねえんだよ」

「だから諦めるの？」

「……ああ」

「諦めちゃ駄目。諦めたらどうにかなることもならないよ」

「この状況で諦める以外の選択肢があるのか……？」

「信じれば、私が力を貸すことが出来る。だから、諦めないで」

目の前の少女が言っている言葉をなんとなくだけ信じたくなかった。

少年は自分の体を無理矢理にでも起き上らせようとした。

「だな……なんだかこのまま寝そべってるのは悔しいや」

「その調子。“光よ、彼を癒せ”」

光が少年の体を包んでいく。

「なんだ……これ？」

少年は自分の体の痛みが段々と引いていくのを感じた。体も少しずつ動けるようになっていく。

「ね。どうにかなったしょ？」

「ああ、お前凄いな」

「えっへん」

普通自分でえっへんなんて言うか？　と思い微笑んだが自分たちが置かれている状況が、そんなことを思っている時ではないということに気が付いた。

まだあの男はこの部屋にいるんだ。

でも、俺の傷が癒えたことにはまだ気が付いていないはずだ。

あの男は例え力のない物でも力をとどめれば固めれば強いとか言っていたことを少年は思い出していた。

今なら魔法も使える気はしたが、最上級魔法など使う気にはなれなかったのである。

どうせなら直前まで気が付かれないように下級魔法を使うことに決めた。

「ロアグレート ストレート
下級 直線魔法……」

小声で唱え、狙いを男の方へと向ける。

少年はこんなにかつそりと相手を狙うのは初めてだなと思った。

「『センチタリム
貫く槍』」

少年は魔法を出来るだけ集中して1点にとどめるよう意識した。

「ん？」

少年が魔法を放つといつもよりも小さく鋭い形をした魔法が男に向かって飛んで行った。

しかも速さがいつもの倍以上だ。

男が魔法に気が付いたかどうかはわからないが、少年の方へと振り向いたときにはもう男の胸を貫いていた。

「んが!？」

魔法は男を貫いただけではなく、さらに後ろの（恐らく）魔法耐性のある壁に穴をあけた。

「すげえ……」

男のちょっとしたアドバイスだと思っていたことが、少し集中してやっただけで威力がかなり上がった。

「まさか……まだ動けたとは……ぐっ」

「動けたのは自分の力じゃねえ。この子のおかげだ」

「なるほど……精霊の加護か」

男は苦しそうに仰向けに倒れていた。
胸を貫かれたのにまだまだ動けそうに見えて少年は身構えたままだった。

「お前が俺にアドバイスしてなかったら、俺は今殺されてたかもな」
「ふふふ……構わんよ。なぜなら私はお前を強くするのが望みだからな」

「なんだそれ」
「いつかわかる。それまで生きていることだな」

少年は今度中級魔法や上級魔法にも試して見ようと考えていた。
今あの黒い服を着た男にトドメを刺しに行くのもいいとも思ったが、何だか嫌な予感もしていたので少年は男は放っておくことにした。

「とりあえず、今度こそこんな所からおさらばだ。……とお前はどうしたい？」

少年が少女に話しかけると返答がかなり早く返ってきた。

「連れてって」
「わかった」

少年は少女の鎖を手で引きちぎった。すると少女は床にペタンと座り込んだ。かなり疲れているのだろうと思って気にしないで鎖を取る作業に戻った。

が鎖を根本から切っても金属の輪は取れない。そういえば自分もこの輪は取れていなかったなと呑気に考える。

とりあえずここを出てから魔法で削り取ろうと思いエレベーターに向かおうとすると鍵が飛んできた。

「それで全員の鍵が外れる。さつさとはずせ」

「本当か？」

「嘘は言わない。それに、その手に嵌めたまま研究所を出られた方が困る」

「なるほどね……」

つまり周りの何も知らない、一般の奴らには知られたくないということだろう。

少年は自分の輪を外してから少女の輪も全て取った。

「立てるか？」

「立てない」

「……乗るか？」

少年が背を向けて少女を乗りやすいようにする。

「うん、でも貴方の服が汚れる」

「多少だ。気にするな」

「わかった」

少女は少年の首から手を回し？まった。少年はよいしょと言いながら少女を背負った。

「軽いな」

さつき少女が施してくれた精霊魔法（多分）のおかげで体の状態が元の状態まで戻ったようだ。

少年がエレベーターまで戻ろうとすると少女に止められた。

「どうした？」

「そつちじゃない。こつち」

少女はエレベーターの方ではない、右の方向を指さしていた。

「本当か？」

「うん」

少年は少女の言葉を信じて右の方向へ進んでいく。だが、右の方向には水槽の壁しかない。

「ああ、1つ言っておこう」

少年が壁の方へ向かっていると男の声がした。

「まだ気失ってなかったのか」

「勿論この程度じゃ……ね。ただ君が私と戦おうとしないからこうやって寝そべっているだけさ。それで、君に1つ忠告しておこうと思つてね」

「なんだよ」

「ここからは十分に注意して行動するべきだ。君以上に強い者はたくさんいる。私より強い者だつてな」

「それはもう十分理解したつもりだよ……」

「ならいい。それと、一応名乗っておこう。私はラドンだ。また会おう、実験体152」

「会いたかねえよ」

少年は話を聞きながら壁の方まで辿りついたので、少女に再び聞いた。

「ここでいいのか？」

「うん。壊して」

「……辛いこと言ってくれるじゃないの」

この壁を殴って壊すには痛いだろうし、魔法で壊すにしても一苦
労するだろう。

でも壁を殴って痛い思いをするよりは魔法を使った方がいい気が
して少年は魔法を使うことにした。

インタデメリー
「中級魔法術 分裂魔法 『十一の剣』」

今度は分裂魔法、またの名を複数魔法とも呼ばれる魔法で少年は
さつき放った魔法の威力をあげたように、これも威力を上げようと
したが、今度は1点集中ではないのでコントロールが出来ず、いつ
もとあまり変わらない威力だった。

「練習が必要だな……ん？」

壁に突き刺さった11本の剣は壁を裂いていた。そしてその先には
通路が見えた。

「ね」

「凄いな、お前」

少年は感心したように言いながらその通路へと向かって歩いて行
った。

4話

「そうだ」

「どうかしたのか？」

少年が少女を背負ったまま通路を歩いていると背中の子が話しかけてきた。

「貴方の名前って、何？」

「名前……？ ああ、なんだっけかな……。ずっと実験体152とか152とかでしか呼ばれてなかったから覚えてないんだよな」

「そうなの？」

「そうなの」

「じゃ、私がつけてあげるよ」

「いや……いいよ」

「貴方は魔法も使えるし剣も使えるから、魔法戦士？ 騎士？」

「人の話を聞かない奴め……戦士のがあってるんじゃないか？ 俺は馬に乗ったりはしないし」

「じゃ騎士で」

「おいこら」

「魔法騎士……」

少年の背中で少女は名前を考えているらしい。

少年にしてみれば結構な迷惑だったりもするのだが。

「うん。貴方の名前はシキにしよう」

「騎士を逆にしてシキってか？」

「なぜばれた」

「おい」

「駄目？」

「いや……まあいいや」

少年 シキは気軽そうに言った。

「短くて覚えやすくていい……かな。お前の名前は何ていうんだ？」

「セシリア・テイスタ」

「セシ！？……と違ったか。悪いなんでもない」

「？」

シキは少女 セシリアが前の世界の女が言っていた昔殺してしまった女性の名前に似ていたので少し驚いた。

「あー。でここからどうやって進んでいくか知ってるか？」

「うん。真っ直ぐ進んで、落ちればいいの」

「落ちる？」

「行けばわかる」

「そうなのか」

シキはそう言われてから何も言わないで進んで行った。後ろにいるセシリアも黙って肩に？まったまま黙っていた。

しばらく歩いていくと通路の終わりが見えてきた。

「お、もうすぐか」

「そうみたい。下に気を付けてね」
「ああん？ うおっ！？」

気を付けてと言う意味が出口の近くまで来るまでよくわからなかったが、出口まで来たら意味がわかった。
通路の先は道がなかったのである。

シキはどうやってここを超えるのかと周りを見渡したが、向こう側に道は続いてないし壁にも隠し扉のようなものは見つからなかった。

「ここ……どうすればいいんだ？」

「簡単。落ちればいいの」

「は？」

「大丈夫。私が補佐するから」

「……信じるからな」

「任せて」

シキは思い切って通路から飛び出した。

前の世界の体だったならば、シキは普通に落ちても平気であつただろうが、今は状況が違う。

全ては後ろに？まっているセシリアに掛かっているとんでもないのだが、シキに？まっている手が少しギュッと強くなったので不安になってきていた。

大丈夫……なんだよな？

落下スピードがどんどん上がって行くが、まだまだ地面が見えてこない。

シキはいざとなったら自分で魔法を地面に向けて使って、止まれるかはわからないがやってみようと思っていた。

「ん？」

下の方を見ていると小さな点が見えて来た。きっと誰かいるのだろっと思いつつも面倒だと思った。

地面に無事に着地出来たとするのならそのあとすぐにそこにいる奴らと戦うことになるだろうからだ。

それまで悲鳴などはあげないようにして、出来るだ気付かれないようにしようと思った。

それにしても凄く速さで落ちているなあと思ひに考える。

このまま何もせず落ちたらきつとトマトが潰れたようになりそうだ。

「そろそろかな。 “ 光よ、私達を保護せよ ” 」

セシリアがそう何かの呪文を唱えるとシキとセシリアの周りに少し淡い水色の光が包み込んだ。

速度は全く変わっていない。

「え？ まさか、これだけ？」

「そっだよ？ 安心でしょ？」

「安心出来るかああああああああああああ！！！」

思わずシキは悲鳴をあげてしまった。

だが、下にいる人らしきものは見向きもしなかった。

ズドーンという音が響き渡り、シキ達が落下した場所はかなりへこんでいたが、シキ達は無傷だった。

「すげーな……精霊魔法」

「ぐっ！」

「いやだからそういうことは言葉にして表さないと思うぞ？」

セシリアは指をぐつとシキの顔の前に出していた。

「ってこんなことしてる場合じゃないよな」

上から落ちてくるときに見た人影は全て敵のはずなので、気を緩めてはいられない。

「ん？」

周りをよく見てみるとおかしい状況だった。

シキはまだ何もしていないのに、周りでは兵士らしき人たちが倒れているのである。

「もしかしたら、俺たちみたいにここから逃げ出そうとしている奴がいるのか？」

「わからない。でも好都合」
「だな」

ここからの道を確認してみると、この部屋の間口に扉があった。その扉を開けると通路に繋がっていた。通路は一本道のようなので、もしかしたらここを通っていけば兵士を倒した人に会えるかもしれない。

シキは進み始めたが、相変わらずセシリアを背負ったままである。もしこのまま戦闘をすることになったら若干辛い気がしていたが降ろす気にはならなかった。

さっきの部屋にいた男くらいの強さを持つ奴ならば、降ろさなければいけないだろうが。

「音が聞こえる」

「本当だ。誰か戦ってるみたいだな」

通路を進んでいくと扉があり、その向こうから音が聞こえていた。シキは戦っている人がどんな奴なのかわからなかったので、慎重に姿が見られないようにしながら扉を開けた。

扉の中では少し身長が大きい男が周りの人たちをどんどん殴り飛ばしていた。

偶に攻撃を食らったりもするが反射物理防御魔法術で跳ね返している様子だった。

と動きを観察していると、あることにシキが気が付いた。

それは、今戦っている男が先ほどシキが戦っていたやたらと筋肉が凄い男だったのである。

「……あいつ何やってんだ？」

「知り合い？」

「んー……。さっき殺し合いをした仲？」

「そうなんだ」

というより、なぜあの男が今動いているのかと云うことが疑問だった。

先ほどシキがあのお男に魔法を食らわさせてから、まだ1時間程度しか経っていないというのに、奴は見た目元気そうに動き回りながら戦っているのである。

「そんなことはどうでもいいか」

「うん？」

「なんでもない」

「？」

問題はあいつをどうするかである。

このまま放っておいたら周りの敵を全て倒して進んでくれるかもしれないが、きっとあいつだって倒せない敵がその内いるはずだし、それにあいつが出口に向かっていても限らないのでどうしていいかわからない。

「助けてあげたら？」

「ん？」

「あの人ピンチだよ」

「あ」

シキが再びあの筋肉男の方を見ると周りの人たちに取り押さえられていた。

あいつあんなに弱かったのだろうか？ とシキはまた考え始めた。さっき戦った時のダメージが残っているのではないだろうか。

「仕方ない。一応助けておくか。あいつくらいなら、きっと倒せるだろうし。中級魔法術インタデメリー 分裂魔法ディフシオン 『十一の剣』ウンデカル」

シキは扉から手を突出し、筋肉男を押さえつけている研究員たちに向かって魔法を放った。

放った直後に力を1点に纏めておく。ということを忘れていたのだ、練習しておけばよかったと後悔した。が、ちゃんと魔法は敵に当たったようで、研究員たちは倒れた。

「久しぶりだな。お前そんなに弱かったのか？」

「……誰かと思ったら、てめえかよ」

「おいおい、助けてやったんだから少しは感謝しろよ」

シキは話しかけながら男に近付いて行く。勿論警戒することを忘
れずに。

「……ありがとう」

「うお！？ 本当に言いやがった！？」

「なんだよ！ 言えって言ったのはてめえじゃねえか！！」

「いや、すまん。本当に言うとは思ってなかった」

シキは男の傍に寄って腰を下ろした。

なんとなくだが、男がこちらに対して攻撃してくると思えな
ったのである。

もし、攻撃されたとしても防御魔法を発動させたらなんとかなる
と思っただのも理由の1つだが。

「……お前、よく生きてるな」

「実際にそうになったけど、こいつのおかげで何とかなった」

そう言っただけでシキは後ろにまだ？ まったままでいるセシリアを指さ
した。

「むー、こいつじゃなくてセシリア」

「はいはい。で、お前に聞きたいことあるんだけど、いいか？」

「……セシリア？ お前……まさかあの人から逃げ延びたのか？」

「ん？ あーあの黒い奴？ 逃げれたけど？ ギリギリで」

「嘘だろ……あの人から逃げ切るだなんて……お前やっぱりなんか
おかしいぞ」

「そうですか。別にどうでもいいですよ。で、聞きたいことがある
んだが？」

「あ、ああ。助けられた身だからな。答えることなら答えてやるうじゃねえか」

「助かる。じゃ、一気に質問するから答えれる物から言ってくれ。まず、なぜお前はそんなにも元気に動いている？ 俺が魔法でなんにも串刺しにしたのにも関わらず無事で居られるのはなぜだ？ そしてお前はなぜ他の仲間から狙われている？ もしくは自分から敵対している？ そしてお前はこの研究室から出る場所を知っているか？ もし知っているのなら教えてほしい」

「本当に一気に来たな。まあ、全て答えられるから答えよう。まず俺が普通に動いているのは回復結晶おれいって言われているまあ、戦闘屋みたいなのにしか知られてないものを使ったからだ。そして俺がなぜ他の奴らを倒して行っているかというのは、俺がここから排除されようとしているからだ。そして最後の質問だが、もちろん知っている。俺は研究所こしに勤めて結構経ってるからな」

男は全ての質問に答えた気でいるらしいが、シキは1番最後の教えてくれるか？ という質問を言っていないことに気付いていた。それに、新しいことも知りたくなかった。回復結晶とかと呼ばれる結晶（なのは定かではないが）のことだ。

前の世界ではそのような物は知らなかったし、それにこの世界で手に入れることが出来ればかなり有利になるだろうと思ったからだ。

「それで ちょっと待った」

「あん？ まあ俺も少し休憩するとするか」

シキはこの男を利用出来ないかと考えていた。

先ほどまでは敵だったとはいえ、今この男との目的は同じだし、この男に付いて行けば何の罠にも嵌らずに出口まで行ける。

そこから先は考えていないが、出口までという契約で共に行動し

ていたら結構ここから楽に進むことが出来るはずだ。仮にもこの戦闘部隊の副隊長だったらしいので。

「なあ、俺とお前は目的一緒だよな？」

「まあ、そうなるな」

「ならよ、俺たちとこの研究所から出るまでいい。協力しないか？俺も結構強い方だと思っているし、役に立つと思うぞ？」

「……少し考えさせてくれ」

そついうと男はぼんやりと宙を見上げていた。

シキはそういえばこの男の名前知らないなーと、のんびり考えいた。断られた時にどうするかは特に考えていなかった。
10分くらい経った後に男が言った。

「決めた。組もう」

「お、そう決めてくれると嬉しい。少し前まで敵だったが、ここからは一応仲間だな」

「ああ。よろしく頼む。俺はガスタス・ウェルマーだ」

「おう。俺は……えーと、シキだ。背中に乗ってる奴はセシリアだ。精霊魔法使いらしいぞ」

「そいつはつえーな」

「……」

「？」

後ろからの反応がないので、少しシキは不審に思ったが気にしないことにした。

隣にいた男はガスタスと名乗った。

シキは昔にもこんな名前の奴がいた気もしたが、忘れることにした。

「さてと、それじゃあ行きますか！」

ガスタスは立ち上がった。

シキも従ってゆつくりと立ち上がる。

「ここからどうやって進んでいくのかは全てお前に任せる。頼むぞ」
「わかった。奴らが来たときは頼りにするぜ。それに、まだあいつがいるからな」

「あいつ……？」

「さっきお前と初めて会ったときに一緒にいた男だ」

「ああ、あの帽子被ってた小さい男か」

「あいつが今のところ一番厄介な敵になるはずだ」

「わかった。油断しないで行こう」

「勿論だ。付いて来い」

ガスタスに付いて行きながらシキは後ろに背負っている少女を見た。

さっきから反応がないと思ったら寝ていたのである。

しかし腕はちゃんとシキに？ まったままなので落ちる心配はないだろう。

「困ったな……」

ガスタスに気付かれないくらいの声でシキがそつとつぶやいた。
このまま後ろで寝ている少女を放っておいてもいいのだが、敵との戦闘になった場合結構面倒になるかもしれないからだ。

今シキが遠距離攻撃できるものと言えれば魔法くらいしかないので、その他の戦いは全て格闘になる。

その場合後ろにいる少女が耐えられるかどうか。

と言ってもそういう場合は後ろで寝ている少女を起こせば問題な

いのだが、シキには選択肢として頭に現れなかった。

「ガスタス」

「なんだ」

「俺の連れが寝てる。すまないが、魔法援護だけでいいだろうか。その、帽子被った奴が来たときはちゃんと起こすからさ」

「……十分だ。と言うよりも雑魚研究員など、俺の力だけで十分だわ!!」

「そうか。なら全部任せる」

「おうよ!」

さっきやられそうになっていたのはどのどいつだ。とシキは心の中で思っていたが言葉には出さないでいた。

雑魚敵を全て戦わずに済むのなら、楽なものである。

ガスタスは人が3人程度並んで歩けるような通路を進んで行っていた。

シキはその後ろをゆつくりと進んでいく。後ろからも敵が来る可能性もあるので、後ろの警戒も忘れないでいた。

ただ進んでいるだけで会話はほとんどないので、シキは先ほどの質問でガスタスが言っていた回復結晶のことを聞いてみることにした。

「さっき言ってた回復結晶ってよ」

「ん? 気になるのか」

「ああ。それと高価な物なのか」

「そりゃあ、おめえどんな傷でも死なない限りはほとんど回復するからな。結構高いぞ。確か3エルと20ルコートくらいだったはずだ」

エルーとルコートというのは、この世界の通貨である。

ルコートというのは1番低いもので、エルーというのは50ルコートで1エルー。そしてエルーの上にはシルエと呼ばれる通貨もある。

ちなみに1シルエは20エルーである。

「まじかよ……それって1個でだよな？」

「ああ。そうだ」

「高いな……」

便利なものだがかなり高価なものだったらしい。

確かにほとんどの傷が治るといふには惹かれるが、そんなにお金を出して買う程も価値はないな。とシキは思った。

「おっと。敵さんの登場だ。言っておくが、ここからあと少しで研究所から出られるからな」

「そうなのか。じゃ、頑張ってくれ。危なくなったら魔法で援護するから」

「任せろ！」

通路の向こう側から兵士が2人でこちらへ向かって来ていた。相手は銃を持っており、既にこちらへ撃とうと構えていた。

シキは防御魔法を使いながら回避しようとし、ガスタスは真正面から突撃していった。

「おおおおお！！」

ガスタスが兵士の1人の顔を殴り、相手をよろめかせた。1回の攻撃で倒れない所を見ると結構なやり手であるようだ。

ガスタスが兵士を殴った隙を見て、もう1人の兵士がガスタスに

向かって銃を撃つが、それはガスタスの防御魔法で跳ね返されていた。

シキは出来るだけ相手に気付かれないように動かなかった。こちらへ攻撃が飛んで来ると背負っている少女に衝撃が響きそうであったから。という理由を頭の中で考え、本心は戦うのが面倒だから動かなかった。

ガスタスはよろめいていた兵士にもう2撃与えて、相手を倒した。そしてもう1人の腹に強烈な1撃を与えて倒していた。

「そっちは大丈夫か？」

「ああ、1撃も食らってない」

「そうか。お、お前あの光が見えるか？」

「どれだよ」

ガスタスは少し向こう側にある壁を指さしながらシキに聞いた。シキは光っている所など見えなかったので不思議に思った。

「やっぱり俺らみたいな関係者じゃなかったら見えないのか……もうその壁を通れば出口だ」

「？」

シキはその光とやらが見えなかったのでただガスタスの後に付いて行った。

「ここだ」

ガスタスが指さしている壁の前まで来たが、他の壁と違う所がシキにはよくわからなかった。

そうしているとガスタスがその壁を手で殴るような形で押した。すると扉が開きちよつと小さな部屋への入り口になっていた。

「人体実験場は迷路かカラクリ屋敷か？」

「否定は出来ねえな」

2人が部屋に入ると少し先に扉が見えた。

「あれで出れるのか？ 何かあつさりとこれだな」

「だが、ここからは簡単には通さん！！」

「！？」

上から声が聞こえた瞬間に上から小柄な男が降ってきた。帽子を被り自分の身長約2倍くらいの剣を持っている。

「ちっ！ 来やがったか……クエスタ！！」

「さつき会ったばかりだがガスタス！ それにしても、お前らまで出口（こ）に来ているとは、情報にはなかったんだが……」

そついい目の前の帽子男クエスタは剣を縦に構えながらシキの方を見た。

「セシリア、起きろ。また後で背負ってやるから少し床に座つてろ」

「うー……？ わかったー」

セシリアは寝惚けている様子でぼやーとしているが、ちゃんと言われた通りに床に座った。

まだ半分寝ているといった感じだろう。

「さて、こいつを倒さねえと進めないぞ？ 気合い入れろ！！ 小

僧！…！」

「言われなくてもそうしてやるよ、ジジイ…！」

5 話（前書き）

また遅くなってごめんなさい

5話

「それで？ 何か作戦とかあるのか？」

「あるわけないだろう？ こいつと会うのなんざ、計算に入ってなかったんだからな」

「おいおい、さつき会いたくねえとか言ってなかったっけか？」

「知るか。さっさと倒してここから逃げるぞ！」

ガスタスはそう言ってクエストの方へ突撃して行った。

「ログアデーレ
下級魔法術 ディフシオン
分裂魔法 『クインティル
五本の棘』」

シキはガスタスに合わせて分裂魔法をクエストの方へと放った。

「ほう。意外にいい組み合わせのよう……だな！」

「！？」

だな！ と言った瞬間クエストは呪文を唱えることなく同じ分裂魔法を放ってシキの魔法を防ぎ、そしてガスタスと戦闘を始めた。シキはかなり驚いたが、ガスタスは驚くことがなかった。

呪文を唱えないで魔法を使うなんてことは前の世界ではあり

えないことだったはず……！

シキは自身の心の中で戸惑っていた。

この世界には自分の知らないことがたくさんありすぎると。

「シキ。今は無音魔法。サイレントマジック 普段呪文を唱えて発動するよりも威力は

落ちるけど、速さだけを求めるなら1番の技、だよ。あの人、シキの魔法と同じ威力をこの技で放てるってことはかなり強いから気を付けて！」

「あ、ああ……」

後ろにいたセシリアが説明してくれた。どうやらこの世界では常識の範囲内だったらしい。

シキにしてみれば常識はずれもいいところなのだが。

「参ったな……すぐに放たれる魔法の対処法なんて知らねえぞ……」

目の前でガスタスがクエスタの剣をギリギリで躲し、懐に入ろうとするが中々うまくいってなかった。

「中級魔法術 インタデメリー 分裂魔法 ディブシオン 『十一の剣』！」

シキは隙を見て間からクエスタに向かって魔法を放つが、全て剣で往なされたり、無音魔法とやらで防がれてしまった。

「ん？」

シキはクエスタが使う魔法に違和感を感じた。

シキの魔法を相殺出来る程の威力の無音魔法を使えるというのなら、なぜ今の魔法は中級呪文で相殺したのではなく剣と下級呪文を合わせて躲したのだろうか。

中級魔法を使わなかったことで、ガスタスにはかなり隙を見せてしまったはずだ。

それでも1撃もまだ食らってはいないようなので、クエスタが強いのかガスタスが弱いのかのどっちかであろう。

シキがガスタスの援護をしているとはいえ、このままだったらガスタスはクエスタに負けてしまうだろう。

今2対1の状況でガスタスは押され気味で反撃など出来そうもない。

「仕方ない。使いたくなかったけど、やったみるか。ガスタス!! 下がれえ!!」

「あん!? うおっ! わあっ! さがりやあいんだろ!!」

シキが話かけたその時にクエスタの剣がガスタスを貫きそうになった。危うく躲しながらガスタスは後ろに下がっていった。

「エクストラ最上級魔法術 ストレート直線魔法……」

シキはクエスタのいる範囲だけに魔法をとどめるように集中しながら呪文を唱える。

「『キサグラム六芒星』!!」

呪文はラドンと言っていた男と戦っていた時よりも小さく、そして鋭くなってクエスタの方へと向かっていく。

「むん!!」

クエスタが気合いと共に剣で最上級呪文を防ごうとしていた。い

くらなんでも不可能であろうとシキは予測していた。
剣と魔法がぶつかった瞬間に爆発が起こりクエスタの姿は見えなくなつた。

「……やつたか？」

シキが隣まで来ていたガスタスに訊いた。

「わからねえ。だが、奴を甘く見ない方がいいな。それにしても、お前まさか最上級魔法使いだつたとはな」
エクストラ

「まあな。今じゃ雑魚最上級魔法使いですけど」
エクストラ

「なんだそれ、皮肉か？」

「いんや」

実際この世界に来てからそうなのであると、シキは思っていた。
この世界にいる最上級魔法使いならば、自分よりも数倍強い奴ら
エクストラ
がいるのであろうとシキは予想していた。

「それにしても中々現れな……」

「！！」

ガスタスが話していた途中に胸を何かで貫かれていた。

シキがその何かを、理解するのに数秒かかってしまい、すぐ近くまでクエスタが近付いていたことに反応できなかった。

「ふん！」

「っ！」

近付いていたクエスタはシキを蹴り飛ばすとガスタスに突き刺していた剣を抜いた。

「んがぁ……てめえ、ほとんどダメージ当たってねえのかよ……」
「あの程度の最上級魔法^{エクストラ}では死ぬほどの傷は受けない。少しは食らったがな」

この世界の奴らは化け物ばかりだな。と心の中で思いつつシキは苦笑した。

最上級魔法^{エクストラ}を生身で食らっても生きている奴なんて前の世界ではありえなかったことだ。

シキの魔法が少し弱くなった。という所為もあるかもしれないが。

「シキ。貴方は剣使えるの？」

「ああ？ まあな。そこらの奴らよりは使えるはずだが……」

少し遠くの方からセシリアの声が聞こえてきた。

「なら、私を信じてくれる？」

「またそれか？ いいぜ、信じてやるよ。何を信じるかは知らんけど」

「！ シキ！ 行つて！！」

「お、おう」

セシリアが急いだように言った意味がよくわからなかったが、クエスタとガスタスの方を見た瞬間に理解し、そっちへ向かって全速で掛けて行く。

ガスタスがクエスタにトドメを刺されそうになっていたのだ。抵抗しているとはいえ、胸を貫かれているガスタスが最初戦っていた時よりも動きが悪くなっていた。

「シキ。貴方は剣を持っている！ 光よ、彼に力を」

後ろから聞こえてきたセシリアの声の意味がわかりずらいな。と思いつながらシキは頭の中で自分が剣を持っていると信じる。

ただ単に剣を持っていると信じてと言ってくれば何も迷わずにそのことを考えられるのだが、言いきられてしまうと、今まさに剣を持っていると錯覚してしまいそうだった。

剣は自分の手に現れていなかったが、きっと精霊魔法使いのセシリアが言うのだから何か魔法を発動させてくれるのだろう。と信じてシキはクエストに斬りかかった。

シキの手はまだ何も掴んでいなかったが、剣を持っている感じで相手の剣に当てる感じでぶつかっていった。これで何も起こらなかったらシキはただ隙を見せただけである。

なぜこんなにも彼女を信じれるのか。シキ自身もわかっていなかったが、考えることは一旦預けることにした。

「む!？」

ガキーン! と音がしてクエストの剣が何かとぶつかり合った音がした。

「貴様……! まさか……!」

クエストがかなり驚いている。実際シキの方が驚いているのだが。シキは光で出来たような剣を持っていた。実際に剣自体が光っているのでもしかしたら光で本当にできているのかもしれない。

剣と光で出来た剣で鏢迫り合いをしていると、クエストの方から距離を置いた。

「……これは、思ったより厄介じゃないか」
「大丈夫か？」

クエスタの言葉を見殺してガスタスの方へと声をかける。

「なんとかな……だが、もう戦闘じゃ足手まといになりそうだ」
「そうか。なら下がって居ろ。ここからは俺がやる」

シキはそう言ったあとクエスタの方へと突っ込んで行った。もう魔法は使わないことにしたのである。

「はっ！」

クエスタは無言で魔法を放ってきた。

魔法の数が5つだったので、下級の分裂魔法だと判断した。

3つの魔法を掠るくらいのギリギリのところで躲し、他の2つは剣で叩き落した。

「なんだ……この感覚……昔どこかで……」

シキはなんとなく呟きながら、クエスタと剣をぶつかりあった。
キン！ という音が部屋に響く。

クエスタの動きは見た目通り素早く懐に迫る隙がなかった。しかも少しずつ後ろに下がりながら戦ってくるので、追い詰めるのが難しい。

一方シキは攻めているが、クエスタにダメージを与えられず、逆に少しずつ傷を受け始めていた。

だがシキは傷を受ける度に自分の神経が段々と研ぎ澄まされていく感じがしていた。

そして、クエスタの攻撃の速さが遅く感じるようになって来ていた。

「終わりだあ！！」

クエストがそう言いながらシキの方へと迫ってくる。

この行動は初めてなのでシキは一瞬動きを止めた。

そしてクエストはシキのちよつと手前辺りで、自分の体を横に回転させながらこちらへと向かってきた。

しかもその回転速度は恐ろしい程速かった。クエストの射程範囲に入ったらすぐさま細切れにされてしまいそうだった。

「シキイ！！ 下がれ！！」

ガスタスが叫んだがシキは無視した。

なぜか自分ならばあの回転斬りを捌くことが出来る気がしたからだ。

シキは目の前で回転している男が具合を悪くすることはないのだろうか。と本当にどうでもいいことを思いながら回転している剣に軽く自分の剣をぶつける。

剣が手から離れそうになったがなんとか持ちこたえた。クエストの剣の勢いは消え去り一瞬その場に剣が停止していた。

これで回転は止まった。が、今度は逆回転しはじめた。しかし今度はゆっくりと回転していた。

どうしてそんなにゆっくりなのかはわからなかったが、大きい隙が出来ていたのでシキは迷わずクエストの方へと向かった。

「せいやあ！！」

「！」

シキが近付いて行くとクエストが剣の動きをいきなり変えて、ま

た逆方向に急に回転させ始めた。

シキは近付いてくる剣とは逆の手に剣を持っていた。

もしシキが逆の手に剣を持っていたならば、簡単に彼の攻撃を凌ぐことが出来たであろう。

「小僧！」

ガスタスが声を上げる。だが、シキの姿はどこにもなかった。

「え？」

ガスタスが呆けたように言った。

シキが細切れになったのかもしれないとも思ったが、クエスタの周りに血が飛び散っていたりしなかったので、それはないかと確信した。

それに、ガスタスはクエスタよりもちょっと奥の方にいるシキの姿を確認したので安心した。

逆にクエスタはかなり辛そうな表情をしていた。

「ぐ、ああああああああ！！」

「！？」

シキは自分があのにきにどうやってここまで来たか覚えていなかった。

ほとんど無意識と言ってもいいのだが、若干移動する前にやったことは覚えていた。

クエスタの右腕を斬り落としたのである。

が、シキにとってはそんなことはどうでもよかった。今自分に起

きている異変の方が重要だった。

「き、貴様ああ!!」

後ろの方でクエストが悶えている声が聞こえたが、シキは無視した。

自分の何かがおかしくなっているものを探っていた。
体が勝手に動こうとし、全てを壊したくなる衝動が襲ってくる。

「嘘だろ……これって昔の衝動じゃ……!!」

シキは後ろからクエストが襲いかかって来る可能性もあったが、シキは自分の体を抑えるのに集中し始めた。

「まさか、オーバーマジック魔力解放を使った？」

セシリアは誰にも聞こえないような声でぼそりつぶやいた。

「シキ。貴方は何者なの……。にしても、暴走している？ 止めなきゃ」

セシリアはシキが何かおかしいことに気が付いて傍に寄って行った。

「シキ。大丈夫？」

「っ！ セシ……リア。は、離れてろ」

「安心して。もう終わったよ」

そう言いながらセシリアはシキに抱き着いた。

「!？」

シキの体はセシリアが抱き着いている場所から力が抜けて行き、その場に倒れ込んでしまった。

「これも……精霊魔法なのか？」

「違うよ。私は何もしてないよ」

シキは体に力が入らなくなって床に倒れたままだった。だが、悪い気はしなかった。

それと、この感覚は昔にも味わったことがある気もしていた。

「なあ。セシリア」

「？」

「お前の名前って本当にセシリアなのか？」

「そっだよ？」

「……そうか。悪い」

「？」

セシリアはシキの顔を不思議そうに見つめていた。

「そっいえば敵は？」

「大丈夫。彼が倒した。安心していて」

「ああ……」

セシリアはシキの頭を持ち上げて自分の太ももに乗せた。
要するに膝枕である。

シキがセシリアの方を見ると、彼女はニコニコと笑っていた。その顔を見るとなぜだかシキは安心してセシリアに体を預けていた。

数分してシキは体に力が入るようになったので、ガスタスの様子を見に行くことにした。

本当ならばガスタスの方が相当な重傷だったのだが、シキは自分の体のことばかり考えていて彼が怪我をしているということを忘れていた。

今まで体に力が入らなくて、そちらへ行けなかったと理由付けして忘れていたことを隠そうと思いながらシキはガスタスの方へと向かった。後ろからセシリアも付いて来ている。

「ガスタス。無事か？」

ガスタスは床に胡坐をかきながらくつろいでいた。

「ああ、こいつが持ってた回復結晶を拝借したからな」

ガスタスは薄い色の結晶をシキ達に見せながら言った。

「普通に盗んだって言えよ」

「まあ！ その扉を出ればこの国ともおさらば出来るんだ！ 関係ねえよ！」

「あつそうかい。……とセシリアはもう歩けるな？」

「うん。歩く」

「よし」

シキはそのまま外へと続く扉へ向かおうとしたが、ふと立ち止まりクエスタの方を見る。

「こいつ死んだのか？」

「いや、お前らが何かやってる間に俺が後ろから殴っただけだから死んではないはずだ」

「よくあの状態でお前動けたな」

「体だけは丈夫なんでね！」

「ほう……なら今度俺の最上級魔法でも食らってみるか？」

「死ぬわ！！」

「えー」

軽口をたたきながらシキ達は扉を開けてその場所から出て行った……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914w/>

魔法騎士と精霊魔法師

2011年10月11日19時55分発行